

異次元の挑戦～見えにくい近未来へ模索しながら（前向きに）進む

阪本洋三（近畿大学文芸学部芸術学科舞台芸術専攻教授）

今回は、大学教員として舞台芸術を教えている立場から、この場で私が発言できることはないだろうかと考え投稿しています。

2020年4月、近畿大学では3月の卒業式に続いて入学式も執り行われず、全ての学生のキャンパスへの入構が禁止されました。大学職員はほぼ通常勤務を続けていましたが、教員は新年度の授業が5月半ばから、しかも「今学期はすべての授業をオンラインで」という法人の方針が出たので、オンライン授業の準備に明け暮れた次第です。私の場合、大学の研究室のコンピューターにはカメラもマイクもなく取り寄せるにも品切れだということだったので、自宅のコンピューターを使っての授業を計画、大型連休返上でやっと準備が間に合った授業開始。全国の大学教員がたぶん同じような模索をされたことでしょう。

近畿大学の舞台芸術専攻は通常、演劇と舞踊の実習（創作活動、演出、振付、制作、照明、音響、衣装、美術、舞台監督、音楽など）と講義（学術的、批評、マネジメント、歴史、他）の両方の授業が行われていて、舞台芸術全般に渡り幅広く学べるところに特色があります。総合大学ですので一般教養も外国語の授業もあります。この専攻が立ち上がって30年以上経っているので、近畿圏の舞台芸術界の現場で多くの卒業生が君臨しています。

前期、私は2年生の「舞踊創作実習」と3年生の「舞踊創作演習」という2つのクラスをオンラインで行うにあたり、教育内容、教育手法、目的や到達点をどう設定するか、至急考え直す必要に迫られました。学生の間にも混乱が広がっていました。3年生は学生同士も教員ともつながりが深いがゆえに、「いつものような授業をしてほしい」「いつものように授業が受けられない」といった不満や不安を抱え、精神的な打撃も顕著でした。対面授業はできないのだから、「リモートでの舞踊創作」、それらの「映像化」へと舵を切らざるを得なかったわけです。ただ、感染症のリスクを避けるためだけではなく、学生には「新しい表現に挑戦する機会」としてこの創作を捉えて「前向きな動機」を持って舞踊創作に臨んでもらうことが最初に乗り越えるべき大きな壁だったと言えます。

2年生の多くは授業の数が多く、朝9時から夕方6時15分まで一日中オンラインで授業がある学生から「疲れ果てています」という感想が続出していました。講義系授業の課題があまりに多くて、舞踊創作も3年生ほどははかどらず全く創作が進まない学生がいたりして、オンライン授業の限界を感じました。加えて、四畳半のベッドの上でダンスを作れと言っているのか、梅雨の時期あるいは猛暑の時期、あるいは私有地や公共空間で、「作れ」「踊れ」と言っているのか、というようなことも含め課題は山積み。ダンスとは何か、身体表現とは何か、オンラインでの舞踊創作教育とはどうあるべきか、模索が続きました。

例年、対面で行う2年生の舞踊創作は、2～3人のグループに分けて1つの作品作りを目指します。自分の意見を言えなかったり、一緒にやりたくない人

と組んだり、経験もスキルも全く異なる学生同士で一緒に創作をしようとするところにはドラマがあるもの。それでもある程度の時間をともに過ごすとお互いのいいところも見えてきて、お互いを深く知ることになったり意見を言い合える仲になるケースが多いのです。この「社会的な人間関係の構築」とでもいうところは、どうやらオンラインではかなり難しいようでしたし、ソロ作品を作ることでは半ば最初から「社会的／ソーシャル」な要素を取り除いてしまわなければならなかったもので、この部分の学びは弱かったかと思われます。

一方で、今回は創作者一人一人が自らの内面としっかり向き合い、振付家、ソロダンサー、映像表現者として何かを表現するべく作品作りに挑戦しました。テーマの設定、場所の選定、構成や演出、撮影や編集まですべてを自分で考え、自分の身体で表現し完成させる、という作業を行わなくてははいけませんでした。毎週、やってきたことを授業で見せて教員の助言をもらいながら、また他の学生のやってきたことをみて刺激を受けながら授業は進みました。ある学生は助言や批評に触発される、ある学生はライバル意識を燃やして自分の作品を高めていく、またある学生は自信をなくして長い時間発表できなくなったりしていました。自己と向き合う、内省的な学びはあったと思われます。

新型コロナウイルス感染症の拡大において舞台芸術が打撃を受けているのは、まさに舞台芸術がソーシャルな芸術である、という側面に原因があります。社会的動物である人間は、他者と繋がりたいという欲求を持っている、群れることを自然な行為として行う。ダンスは身体の触れ合いや、思想や感情の交錯、共振を体感できる芸術です。古来から存在してきた舞踊は身体、場、時、音の共有などで神秘的な世界へ私たちを誘ってくれたり、喜怒哀楽を異次元のレベルに高めてくれたりもします。ダンスのあの感動的な体験を、テクノロジー、美意識、創造性を駆使して別の手段で試し、表現に工夫を添えてみるということが、この時期、必要に迫られつつも能動的な実践として必然的にやってみるべきことだったのかもしれない、と私は感じています。またこの時期、個としての成長もあったようにも思われます。できれば、このようなコロナ禍に作られたこの時期ならではの作品を発表できるような(デジタル空間も含めた)場作りも、今後、公共文化施設協会において提案されるべきことなのかもしれません。

最後に、前期の授業(相原マユコ氏/共同担当)で作られた、3年生の舞踊映像作品のリンクを貼らせていただきます。結局、3年生は振付家である相原先生のディレクションのもと、遠隔でも約10名が1つの作品にまとめ上げ、社会性を取り込めた作品となりました。そして2年生約30名は多様なソロ作品を作りました。ご覧いただければ幸いです。

https://youtu.be/REm_wyg8h3o

<https://www.youtube.com/watch?v=-pAWHHhWE80&t=582s>

<https://www.youtube.com/watch?v=PPXDhh-KVgo&t=306s>

https://www.youtube.com/watch?v=LArY_k4Aacg&t=360s

https://www.youtube.com/watch?v=BbWA_g8bNsA&t=180s